

ポール・ヴィリリオの“accident”に関するノート

本 間 邦 雄

I ^{アクシダン} 事故の博物館

ポール・ヴィリリオは、2002年11月から翌年3月にかけて、パリのカルティエ財団現代美術館において、「到来すること (Ce qui arrive)」(ヴィリリオの説明によれば、ce qui arrive=ラテン語の *accidens*, フランス語の *accident*) というテーマで総括される展示会を主宰している。

もろもろの事象の事故 (*accident*)、災厄 (*désastre*)、破局 (*catastrophe*) をテーマにした、芸術家・造形作家・写真家等の発表作品の展示会であり、^{アクシダン} 事故の博物館¹⁾ と言ってもよい。

そのときのカタログ=作品集『到来すること』(*Ce qui arrive*) の「緒言」には、この展示会の趣旨が以下のように説明されている。

思いがけない破局的な出来事の突発を前にして、私たちがこのように無力の確認を余儀なくされる以上、私たちが事故に晒す (*qui nous expose à l'accident*) この習慣的な傾向をひっくり返す試みをせざるをえなくなる。新しい種類の博物館学、博物館陳列図誌を創始するためである。すなわち、今や、事故を晒す=展示する (*exposer l'accident*) ことを旨とする博物館学、あらゆる事故を、もっとも通俗的なものからもっとも悲劇的なものまで、もろもろの自然の惨事から各種の工業・科学的な災害まで、そして、しばしば無視される種類のもの、幸運な偶発時、まぐれあたり、雷に撃たれたような愛の衝撃、さらには「とどめの一撃」までも、避けることなく展示することなのである²⁾。[強調は原著者]

このように、しばしば私たちが見舞われる事故、「私たちが事故に晒す」受動的局面を逆転して、私たちの面前に「事故を晒す=展示する」試みを組織的におこないたい由を語っている。ヴィリリオの意図をよりわかりやすく知るために、当時の『ルモンド』紙 (2002年12月9日) に掲載されたインタビュー記事を参照してみよう。

「なぜこの美術展がまさに必要だったのでしょうか。」

進歩とは、いわば受け入れられた供犠と表裏一体です。この供犠がどこまで行き及ぶことになるのかを知るためには、^{アクション}事故〔＝偶発事〕の博物館、観測所がなければなりません。それはまた、「一面記事に載る流血の惨事」を未然に防ぎ、破局的な出来事の遺産を冷静に分析するためのもっともよい方法です。アウシュヴィッツとヒロシマはユネスコの世界遺産に登録されています。ある破局的な出来事を遺産登録することによって、それをいわば予防的な考古学にすることができます。この展示会は、哲学的、科学的、芸術的な次元を帯びもする、ひとつの博物館の予示なのです。

「どのようにして事故を提示するのですか。」

カタストロフィー（破局的な出来事）が、いわばそれなりの出来映えに達していることを提示しなければなりません。「実体は絶対的であり必然である。^{アクション}偶発事〔＝事故〕は相対的であり、偶発的である」とアリストテレスは言っていました。事故はひとつの発明であり、新たに創られる成果＝所業とも言えます。自動車メーカーが自動車の信頼性を検査するためにさまざまなクラッシュテスト（衝突試験）をするように、この展示会は、〔直視した者を石化するギリシア神話の女神〕メドゥーサを正面から見つめるための文化的なクラッシュテストなのです。事故に身を晒さないために、事故を晒す＝展示するのです。これは、デモクラシーに提起された問題なのです。

「事故を晒すことによって、（恐いもの見たさの）覗き趣味を誘発することにはなりはしませんか。」

目的は、恐がらせることではなく、直視すること、〔モーリス・〕ブランショのことばを借りれば、災厄の書き記し（^{エクリチュール}l'écriture du désastre）を提示することです。私たちは、破局については無学文盲です。したがって、理解しようとするためには、読み易さがなければなりません。とはいえ、私たちは、露出趣味やむごたらしさの方面に向かうことは拒んでいます。つまり、展示のなかには、あからさまに恐怖を引き起こすシーンはほとんどありませんし、死体そのままありません…。それに説教じみていたり告発的であったりするような言説もありません。これは、前衛 *avant-garde* の作品展覧会ではなく、心構え *mise en garde* のための展覧会なのです。つまり、エアバスは800席

の旅客機を発明することによって、潜在的には800人の死者をつくり出しているということですから…。

「あなたは、このように芸術的な環境の中にいることになります。そのことで、事故の美しさを提示するという危険はありませんか。」

「ああ、神よ、戦争はなんと美しいのでしょうか！」とアポリネールは書いていました。彼は第一次世界大戦の犠牲者でしたが。そこから私が引き出すのは、犠牲者は自分の最後を美しいと思う権利があるということです。死刑執行人にはそのように思う権利はありません。もし恐怖を美化することがあるとしたら、それは人がその恐怖を生きたときに可能であって、単なる傍観者であるときはそのような美化は認めることはできません。9月11日については、その廃墟を英雄化する作品は取り入れていません。けれども芸術家の責務を示している作品群は取り上げました。現代社会は危険というものを否定したので、芸術家はニーチェが告げていたことに意識的であらねばなりません。すなわち、悲劇こそは、それがアテネのデモクラシーの起源にあるように、歴史の一部をなしていることに意識的であらねばなりません。この展示会は、悲劇的なものの回帰の予告編です。だれが一体、芸術家以上に、進歩の悲劇的な次元を感じさせることができるでしょうか³⁾。

質問者にあるのは、さきほどの怖いもの見たさ、興味本位の懸念はもちろんだが、芸術作品としての価値、美的価値のほうに鑑賞者の目が行くように主催者が誘導するという懸念、さらに、事故の事故性ではなくて覗き見趣味に迎合することになりはしないかという懸念であろう。

それにたいしては、ヴィリリオは、まず、単なる傍観者は恐怖を美化するような権利はないと言う。当事者以外による美的対象表現と倫理の問題にかかわることだろう⁴⁾。また直前の質問にたいする回答にあったように、展示物にはあからさまな恐怖の喚起や死体等の露出は一切ないと言う。死者の尊厳に関わる問題に配慮されている。そして、9月11日の廃墟の「英雄化」、言い換えればこのような場合に陥りやすい政治化も避けると言う。

これらは、ヴィリリオの一定の見識を示すものと言えよう。ただし、以上の問題について、われわれはここでその背景、素地を見つめ直しておきたい。そこを突き進むと、深い問題次元が生じると考えられるからである。

展示場という、ひとつ制度において、なんらかのかたちで現実の事故をテーマとする作品群を配置すること。そこには、事故の事故性の隠蔽、無菌フィルターのごとき透明な膜を通して、いわば殺菌消毒された過去の事象を現在という安全な場から視線の対象として提示するといった脱色も生じるだろう。さらには経験的意味が剥がれて単なる形態と配色の美感的対象となるのではないかという懸念も出てくるだろう。

しかし、現実の事故があったとして、その厳密な意味での再現はありえない。どのような表現、呈示も、そもそも、変形され、ずらされた、移され、遅延したものではないだろうか？ そのことをまずは忘れずに押さえておく必要がある。

そして、経験そのものは視覚的印象だけではなく、爆風、粉塵、轟音、臭気、汚染など五感のすべてがかかわることも忘れてはならない。そのことを都合主義的に遮断、抑圧、忘却してはならないだろう。

それと同時に、対象は利害関心を離れた美感的対象としてもとらえうるものであることを排除すべきではないだろう。カントの美感的判断力批判にあるように、対象にたいする、一言でいえば現世的、功利的な関心を脱した態度で接する場合もありうるということだ。意味を括弧にいれた脱関心的な次元も、対象（美的対象であることを排除しない）の判断には欠かせないものである。総じて、美とはなんらかの慄きではなかったか⁵⁾？

さらに忘れてはならないことは、どのような表現も、事故の感覚的印象を希薄化するものとなることである。それらは、人々の通常の記憶がそうであるように、ほとんど避けようもなく希薄化する。そのように希薄化するという事実も隠蔽してはならないだろう。

すでに世界各地には戦争博物館はたくさんある。武器・武具の博物館、コレクションはそれ以上にたくさんあるだろう。ここに事故^{アクション}の博物館で、どのように提示するか。展示場という知覚の場、社会的身体感覚、人間の歴史・文化的背景などさまざまな相、次元が複層的に絡み、真価が問われる場となるだろう。

II 時間の偶有性、付帯性 accident

さて、「到来すること」(ce qui arrive)は、ヴィリリオの言うように、ラテン語の *accidens* であり、フランス語の *accident* につながる。

今日ではもっぱら「事故」の意味で使われることの多い *accident* について、その根底的な意味に留意しつつ、そのキーワードで文明事象全体を考察する意図が推察

されるヴィリリオの考えをしばらく追ってみよう。

“偶有性”とも訳される **accident** について、ここでおさらいをしておきたい。

『電脳世界』の本文で、ヴィリリオは、「エピクロスにとっては、時間は、偶有性^ア＝偶発性^シの偶有性^ダ＝偶発性^ンです」⁶⁾ と言っている。これはどのような意味をなすのであろうか。

II—1 偶有性, 付帯性

その点を検討するために、まず通常「偶有性」と訳されることの多い **accident** の意味から確かめよう。『平凡社哲学事典』によれば、以下のように説明されている。

この語 [= 偶有性] を哲学史上はじめて用語化したのはアリストテレスである。かれによれば、存在はきわめて多義的であり、いろいろなしかたで語られるが、偶有性とは存在者の一つのあり方をしめす語として、つねにそれ自身においてあるあり方と対立的にもちいられる。たとえば正しい人が音楽を解するとか、人が色白い、とかいう場合のようなあり方をいう。すなわち音楽を解するとか、色が白いということは、正しい人にとっても、人自体にとってもけっして本質的なものではなく、たまたまそのとき、その人におこっている性質にすぎない。このようにある主語に、たまたまという仕方でおこり、付随している性質のあり方をいうのである⁷⁾。

このように、「偶有性」は、「つねにそれ自身においてあるあり方」をしているものにたいして、たまたまという仕方付随的に現われる性質であることを確認しよう。なお、後者のほうは、通常「実体」**substance** と呼ばれている。

また、ラテン語の **accidens** は、「付帯性」とも訳される。ちなみにアリストテレス『自然学』(岩波書店版全集)の訳注に、以下のように記されている。

「付帯するもの」「付帯性」「属性」または「偶然性」と訳される原語は τὸ σ υ μ β ε β η κ ό ς, ラテン訳では **accidens**, **accidentia**, また「付帯的に」「付帯性において」と訳されるのは κ α τ ᾶ σ υ μ β ε β η κ ό ς. ラテン訳では **per accidens** または **secundum accidens**. 「自体的に」または「自体において」に対して用いられる⁸⁾。

また、『自然学』本文には、時間について以下のように記述されている。

……時間は、それ自体では、生成の原因というよりもむしろより多く消滅の原因というべきであろう(そのわけは、転化が、それ自体、ものを脱離させることだからである)、そして、時間が生成の原因でありまた存在することの原因であるのは、〔それ自体でというよりも〕付帯的であろう。そしてその十分な証拠は、なにものも、そのもの自らがなんらか運動しまたは行為することなしには生成しはしないが、しかし消滅することは、なににも運動していなくてもありうる、というところにある。そして、われわれの言い慣わしているところの時間によつての消滅というのは最も主としてこの意味での消滅である。ただし、時間は、実は、この意味での消滅を作り出すわけではなく、この意味の転化〔消滅〕が、ただ付帯的に、時間のうちで生じるというだけのことである⁹⁾。

このように、時間の性格として、偶有性、付帯性が確認されるわけだが、それにも、「エピクロスにとっては、時間は、偶有性アクシダンの偶有性アクシダンです」とヴィリリオが言っている。この点に戻ろう。

II—2 偶有性の偶有性

エピクロスに関しては、*Epicure, Lettres, maximes et autres textes* (Flammarion, 2011) を紐解くと、そのなかで、2世紀頃のギリシアの哲学者セクストス・エンペイリコスが、紀元前2世紀後半のエピクロス派の学者デメトリオス・ラコンの解説を引用しつつ、エピクロスの時間と偶有性についての考えを主題化している。上記の書はフランス語版であるが、それを以下、日本語訳してみる。

エピクロスに関してデメトリオス・ラコンが与えた解釈によれば、エピクロスは、時間とは、もろもろの偶有性に関しての偶有性であり (*le temps est un accident des accidents*)、昼にも夜にも、時刻にも、もろもろの感情の現存にも不在にも、さまざまな運動にも静止にも付随するものである、と語っている。〔昼夜など〕これらすべては、偶有性であって、たまたまそれなりの主題となる事象 (*sujet*) に相即していることになる。そして時間はそれらすべてに付随するので、時間を偶有性の偶有性と呼ぶのは妥当であろう。なるほど——われわれの論考をよりよく理解していただけるよう、もう少し前にさかのぼることになるが——、普遍的原理とされるのは、存在する事物のなかで、ある種の事物はそれ自体で存在する一方、他の種類のものは、それ自体で存在するものに準拠するかたちで概念される、ということである。つまり、それ自体で存在するもの

は、実体（すなわち、物体と虚空 *vide*）であり、他方では、それ自体で存在するものに準拠して概念されるものは、「属性」と呼ばれるものである。

これらの属性のなかで、ある種のもの、それらが属性となっている当の事物と切り離せないが、他のものでは、当の事物から切り離せる性質のものがある。それらが属性となっている当のものとして、例えば、物体の抵抗と虚空の無抵抗が挙げられる。なぜなら、物体を抵抗なしで概念することはできないし、虚空を無抵抗なしで概念することもできないからである。そこに、双方の恒久的な属性がある。一方には抵抗することが付随し、他方には抵抗しないことが付随する、ということである。

それらが属性となっている当のものとして、例えば、運動と静止が挙げられる。なぜなら、合成された物体は、絶え間なく運動するわけでもなければ、邪魔されない静止を維持し続けるわけでもないからである。あるときは、それらは運動の属性をもち、あるときは静止の属性をもつ〔以下、括弧内略〕。

時間が随伴するこれらの事象（*choses*）は、したがって偶有性である。—— 私が言おうとしているのは、夜であり昼であり、時刻であり、諸感情の現存であり不在であり、運動であり静止のことである。なるほど、昼と夜は地上をめぐる大気の偶有性である。昼は、太陽から大気にやって来る陽光によって大気の属性となり、夜は、大気に太陽から届く陽光の停止により、大気にやむなく到来する属性である。時刻は、昼あるいは夜の一部分であるが、昼や夜と同様に、それはそれで大気の偶有性である。そして、おのおのの昼、おのおのの夜、おのおのの時刻について、時間は共通の外延をもっている（*coextensif*）。

まさにこの理由によって、昼あるいは夜について、私たちがその属性である時間を過ごしているとき、それら〔昼や夜〕が長いとか短いとか言うのである。もろもろの感情の現存や不在に関しては、それらは苦痛あるいは快楽であるが、まさにそれゆえ、それらは実体ではなく、快か不快を感じている人たちの偶有性なのである。そして、それらは非時間的ではない偶有性である。さらには、運動そして静止はそれら自体、われわれがすでに論証したように、物体の偶有性であり、時間からは切り離せない。なぜなら、運動の速さと遅さ、そして静止の、短かったり長かったりする程度は、まさに時間によってわれわれはそれを計るのである¹⁰。

さて、ここに取り上げられている例で考えてみよう。昼と夜は、大気（*air*）の偶有性である、という考え方についてである。古代ギリシアでは、空気は四元素のひとつであるから、地上の空気である大気は、世界をかたちづくる根本的な要素であ

り、実体のひとつとされる。ところで、地上を包む大気は明るくなったり、暗くなったりする。これは、先の哲学事典の例に沿って語れば、人にあつて白い肌、黒い髪が偶有的であるように、明るい大気（昼）、暗い大気（夜）は、偶有的となろう。すなわち、昼と夜は、実体としての大気に内在するのではない。古代の人々も気づいていたように、太陽の光と熱との関係、つまり他の元素である火との関係で語られる様相であろう。

そのような昼も、朝、昼、夕で明るさが異なる。もちろん、太陽との関係で、大気の様相が変化するのであるが。しかし、昼という大気の明るさが変化してゆくのは、大気の本質をなすのではないのみならず、さらに大気に関して昼という偶有性に帰着するのでもないと考えられている。つまり、昼というものは明るさを第一義にしているとすれば、ただ明るければ昼と言える。ただ一樣に明るければそれで充分昼なのである。夜も、大気の暗さ、闇があれば、夜と言ってよく、それが経過することを含意する必要はない。あるいは極端に言えば、昼夜はフライパン返しのように一挙に逆転、切り替わりがあるかたちでもなんら支障はない。少なくとも連続的ないしは継起的時間を要請しない。

ついでながら、説明として直接に関連するかどうかはともかく、フランス語の *temps* には、“時間”だけではなく、“天気”“天候”の意味もあることを付言しておくのも無意味ではないかもしれない。例えば“*Il fait beau temps.*”と言え、
“天気がよい”という意味である。なるほど、天気は気まぐれで、昼なら昼のとする偶有性と言え。天候は、大気の偶有性である昼の、そのまた偶有性と言ってよいことになろう。時間＝天候は、昼という偶有性の偶有性である、というように。

いずれにしても、このように昼という大気のままの様相が、さらに漸次的に変化するという様相は、これまた、たまたまのことである（偶有的）とする考えかたが見てとれる。ここで、経過して変化してゆく様相 *aspect* を、総括的に“時間”と呼ぶとすれば、“時間”は昼や夜の偶有性と言えることになろうか？

以上が、エピクロスの説に関するわれわれの解釈である。

ところで、ヴィリリオが『到来すること』で言及しているアリストテレスも、先に引用したように「時間は、実は、この意味での消滅を作り出すわけではなく、この意味の転化〔消滅〕が、ただ付帶的に、時間のうちで生じるというだけのことである」¹¹⁾ と言っていた。「時間」の付帶的、偶有的役割が確認される。

ここで、時間は存在にとって本質的ではないか、という見解も当然あろう。時間は、空間と同様に、人間の経験における現象の形式であるという、カント的認識論

の考え方もある。カントの場合は経験的には、時間は実在の根幹的形式として現象する。

しかし、ギリシア的思考においては、時間の経過の様相は認められているが、そのような時間は、たまたまの、付帯の様相とされる。そもそも、永遠不滅の実体が、最上位のギリシア哲学である。永遠不滅は、本質的な実在にとって、そも当然とされる。時間的経過などは、たまたま（偶有的）のことである。仮象であり、不完全な実在にのみ生じること、と考えられる。

ここで注意しなければならないのは、“実体”が時間的経過にかかわらないのは、それが“一瞬”を意味するのではないのみならず、その非時間性は、非活動を意味するのではない、ということである。つまり、時間が凍ったような世界が実体の世界ではない。時間的経過を要するのは、不完全なあり方を示すからである。すなわち、時間を超えて、われわれのあずかり知らぬような十全たる活動をおこないうるし、豊かな思惟の活動もあるのである。われわれには想像がむずかしいが、「時間」という形式に関係しない、それ自体においてある豊饒さであろうか。

われわれはこうして、ヴィリリオの言及する、「時間は、偶有性の偶有性である」（時間は、偶有的なもろもろの事象に、これまた、たまたま、纏いつている偶有性）というエピクロスの説を検討してきた。

たまたまの様相の、そのまた、たまたまの様相という位置づけであるが、今日に引きつけて考えれば、累乗化している。それだけ、幾何級数的になる。単に消滅に関わるのみではない時間という偶有性の瞬時化と濃密化、(ビッグバンのあとに起こったと言われる)幾何級数的なインフレーションなどを思い浮かべれば、そのとき、“実体”が優位で、“偶有性”は付随的という図式は脅かされていることに気づくだろう。それも単に逆転されるのではない、“偶有”の意味そのものが変容する新たな様相のなかに展開するのが今日の現実かもしれない。

起こること、偶有性、偶発性のなかに私たちはいる。^{アクシデント}事故が時間の高濃度圧縮であるような、起こることの起こり加減が加速度的に幾何級数的に増大している環境のなかにいることを否むことはできないだろう。あらゆるものが他のものにたいする動きのなかにある。相対的動きのなかにある。アクシデントの時代にあって、アクシデントの様相がアクシデント化している、ということだろうか。現在のわれわれの文明をめぐる素地を反省するために、accident をめぐる問題系を以上のように踏まえておく必要があると思われる。

注

- 1) 「事故の博物館」という構想そのものについては、ヴィリリオはすでに、例えば「巨大事故が人を〈魅惑〉する——バロック化する現代技術と事故の〈学〉」(浅田彰クロストーク '88, 『朝日ジャーナル』1988年11月4日号)等で、すでに言及している。
- 2) Paul Virilio, *Ce qui arrive*, Fondation Cartier pour l'art contemporain, 2002, p. 5.
- 3) *Le monde*, 2002年12月9日号。回答中の「災厄の書き記し^{エクリチュール}”l'écriture du désastre”は、ヴィリリオが他所で引用もしているように、モーリス・ブランショの同名のエッセー(Gallimard, 1980)に由来する。なお、“désastre”の語は、“astre”(星, 天体)に関係し、「不吉な星めぐり」の意味ももつ。
- 4) ヴァルター・ベンヤミンも、「戦争は美しい」という、未来派のマリネッティの言を引用していた(「複製技術時代の芸術」『ボードレール』岩波文庫108頁)。マリネッティの言を倫理的な観点からのみ責めるべきではないだろう。そのような見え方もあることを排除するのは、単に小賢しいだけである(ベンヤミンは、「この問題提起は、弁証法的思想家が受けて立つに値する」(同108頁)と言っている)。
- 5) ヴァルター・ベンヤミンは、「芸術作品は、未来を反映することのおののきに、終始貫かれている限りにおいてのみ、価値をもつ」というアンドレ・ブルトンの言を引用している(ベンヤミン『ボードレール』, 岩波文庫, 119頁)。
- 6) Virilio, *Cybermonde, la politique du pire*, éditions Textuel, 1996, p. 88. 拙訳『電脳世界』(産業図書, 1998年), 107頁。
- 7) 『哲学事典』平凡社, 1971年, 368頁。
- 8) 『アリストテレス全集』3, 出隆・岩崎允胤訳, 岩波書店, 1968年, 380頁, 訳者注(13)。
- 9) 同上, 184頁。
- 10) Epicure, *Lettres, maximes et autres textes*, traduction et présentation par Pierre-Marie Morel, Flammarion, 2011, pp. 166-167.
- 11) 『アリストテレス全集』3, 184頁。